

## 令和5年度 遠野中学校区の取組の方針→総括（概要版）

遠野中学校区研究員部会

## 1 「まちづくり指標」達成に向けて 本学区で特に課題（重点）とする【大領域・観点別】（中領域）

国語	小2	【読むこと】（話の内容の大体をとらえる）（重要な語や人物の行動をとらえる）
	小3	【読むこと】（話の内容の大体をとらえる）（重要な語や人物の行動をとらえる）
	小4	【読むこと】（主題や構成を読み取る）（考えや感想をもって伝え合う）
	小5	【読むこと】（主題や構成を読み取る）（考えや感想をもって伝え合う）
	小6	【読むこと】（要点をとらえ内容を解釈する）（考えや感想をもって伝え合う）
	中1	【読むこと】（主題や構成を読み取る）（考えや感想をまとめ伝え合う）
	中2 中3	春季交流会の後の研究員部会で、R05 NRTの結果を持ち寄って記入します。
算数・数学	小2	【数と計算】（数の構成と表し方） 【測定・データの活用】（長さ、広さ、かさ）
	小3	【数と計算】（かけ算） 【測定・データの活用】（長さ、かさ）
	小4	【数と計算】（□を用いた式、分数） 【測定・データの活用】（長さ、重さ、時刻、時間）
	小5	【数と計算】（かっこ用いた式、分数） 【変化と関係】（割合）
	小6	【数と計算】（分数） 【変化と関係】（単位量当たり、速さ）
	中1	【関数】（比、百分率、速さ、比例と反比例） 【データの活用】（起こり得る場合）
	中2 中3	春季交流会の後の研究員部会で、R05 NRTの結果を持ち寄って記入します。
理科	小6	（流れる水の働きと土地の変化）（物の種類や水の温度と溶ける量）
	中1	（流水の働きと土地のつくり）（電気の働きと利用）（月と太陽）（人の体のつくりと働き）
	中2 中3	春季交流会の後の研究員部会で、R05 NRTの結果を持ち寄って記入します。
社会	小6	（日本の水産業）（日本の工業地帯の分布や特色）
	中1	（日本の気候と暮らし）【歴史的分野】全般
	中2 中3	春季交流会の後の研究員部会で、R05 NRTの結果を持ち寄って記入します。
英語	中2 中3	春季交流会の後の研究員部会で、R05 NRTの結果を持ち寄って記入します。

## 2 前年度の「成果（○）と課題（●）」

- 児童・生徒の言葉を用いた課題設定や振り返りを活用し導入にいかすことができた。
- 適用問題や練習問題を作成することで、本児のねらいや手立てを考えることができた。
- 振り返りの視点を与え、内容を吟味しながら指導にいかすことができた。
- 課題とまとめ、そして振り返りの一体化が課題としてあげられる。児童・生徒の言葉から課題設定をすることを心がけたが、授業者のねらいと一致しているかが問題になる。一貫した評価につなげる方法を模索していきたい。
- ICTの活用は広がってきているが、どの場面で何を見取るのか、蓄積をどうするかなど適切な評価の在り方について検討が必要である。

## 3 今年度学力向上取組の方向性

## (1) 授業改善の2つの視点と目指す授業像（児童生徒像）について

## 視点1 「課題意識の持続」

目指す授業像（児童生徒像）：学習課題を自分事として考え最後まで学習に取り組むため、児童・生徒の必要感や目的意識等が単元を通して持続する授業。

**視点2 「達成状況の把握」**

目指す授業像（児童生徒像）：授業者と児童・生徒が、「本単元で目指す児童・生徒の姿（付けるべき資質・能力を身に付けた姿）」を明確に共有し、その達成状況について適切な場面と方法で捉え、評価がなされる授業。

**(2) 今年度の重点取組****① 「視点1」について（手立て）**

- ア 児童・生徒に見通しを持たせるため、単元計画や単元のゴールを明確にする。
- イ 課題を児童・生徒の言葉や考え、振り返りから設定することで課題意識の継続を図る。
- ウ 各校の重点教科での成果をいかして、他教科でも実践し指導の充実を図る。

**② 「視点2」について（手立て）**

- ア 児童・生徒の達成状況の把握のために、単元・一単位時間内で適切な評価をするための手立てを講じる。
- イ 記録を残す評価を行うことで、児童・生徒と教師双方が達成状況を把握し、評価の一体化を図る。

**③ 「UAをゼロに！」について**

- ア 自ら学ぼうとする学級を目指すために、小中での生徒指導面の連携をさらに充実させる。
- イ 数学（算数）、英語（外国語活動）における小中での授業交流を行うことで、苦手意識を減らす。

**④ 「学びの連続性」について**

- ア 授業内容と類型化（R4 綾織小提案）した適用問題を家庭学習として提示し、学びの連続性を意識させることで、自主的に学習に取り組む児童・生徒を育てる・
- イ ICT やアシストシートなどを活用して、一人一人に合った課題を提示し、個別に指導できるようにする。

**4 具体的実践（授業交流会・授業実践交流会・校内研究会等について）****(1) 今年度の主な公開授業等**

- ① 第1回授業交流会（R05.5.24）遠野中学校
- ② 第2回授業交流会（R05.9～10月）各小中学校（拡大研究会）
- ③ 授業実践交流会（R05.10.25）遠野北小学校（算）

ここから下については、これからの実践や調査をもとに加筆していきます。

**(2) 実践をとおして明らかになったこと****① 視点1 「課題意識の持続」について（手立ての検証）**

- ア 児童生徒に見通しをもたせるため、単元計画や単元のゴールを明確にする。
  - 既習内容を生かした見通し（内容・方法）をもち、授業の中で立ち返ることで、課題を解決しようとする意欲が持続した。
  - 単元の初めに「単元ゴール」をもたせることで、最後まで課題を意識して学ぶことができています。
  - 年度当初に国語科・算数科の単元づくりについて研究会を開き、日々の授業改善に生かしていく内容や手立てを全体で共有できた。
  - 国語科・算数科において、単元のゴールを明確にして示すことで、単位時間毎の学習課題を児童と一緒に立てることができた。また、その計画に従って児童が見通しをもちながら授業に臨むことができています。
  - 年間計画を意識し、段階を踏んで「身に付けさせたい資質・能力」を単元が進むごとに、レベルアップさせること。
  - ゴールを示すだけでなく、「分かった。」「できるようになりたい。」等の本質的な課題解決に向けた意欲につなげていくことが課題。
  - 本校の重点教科の算数科において、単元全体の具体的な見通しをもたせることとゴールの明確な姿をもたせることが不十分である。

- イ 課題を児童生徒の言葉や考え、振り返りから設定することで課題意識の継続を図る。
- 自分事の課題にするために、生活体験と結び付けたり、児童の言葉を用いたりして課題設定を行うことで意欲的に取り組めた。
  - 児童が考えたいことと、指導者がやらせたいことの整合性が図られてきた。
  - 課題設定に時間を割きすぎず、展開部分に時間をかけられるような授業が増えてきた。
  - 児童の言葉から課題を設定することを心がけ、「自分事」として課題解決に臨めるようにした。
  - 国語科・算数科において、単元のゴールを共有し、単位時間毎の学習課題を単元の導入段階で設定することで、「何のために」「何を」「どのように学ぶのか」授業者と児童が課題意識を持続できるようになってきた。
  - 振り返りの時間を確保し、身に付いた力を表現したり、単元のゴールに主体的につなげたりすること。
- ウ 各校の重点教科での成果を生かして、他教科でも実践し指導の充実を図る。
- 資質・能力の「自分の考えをもち表現する児童」を、授業を観る視点にして互見授業を行うことで、他教科への授業へと生かすことができた。
  - 今年度から算数科の研究をスタートし、有効な手立てを模索中である。児童の課題意識を大切にす意識が指導者に定着しつつある。
  - 他教科での実践については、研究部として全てを把握できているわけではないが、「振り返り週間」の記録から鑑みるに、生かして実践しようとする傾向が見られる。
  - 国語科・算数科のような、重点教科における指導改善・授業づくりにおいては、成果が見られるが、他教科での実践には至っていない。

## ② **視点2**「達成状況の把握」について（手立ての検証）

- ア 児童生徒の達成状況の把握のために、単元・一単位時間内で適切な評価をするための手立てを講じる。
- 適用問題を作成することで、授業者が本時のねらいや手立てを考えることができる。
  - 適用問題で問題を解くことができたことで、児童に達成感や実感を伴う理解を促し、振り返りにより、自己内省を図る手立てとなった。
  - 考えたことが他者にも分かるような図や文、式等でノートやワークシートに記述させることを意識させながら、指導をしているところである。
  - 算数科の場合、一単位時間最後の練習問題の質によって一人ひとりの達成状況を把握したり、目標に関わる場面で発言やノートの書き込みを評価したりしている。ICT を用いて評価していく方法も取り入れていきたい。
  - ぐんぐんサインを授業展開の中に取り入れることにより、児童と授業者が解決方法や学習内容の理解状況を把握することができた。
  - 学年の発達段階を意識したり、中学校区共通の視点を活用したりしながら、学習の振り返りを行うことができた。適宜、振り返りの内容を吟味しながら指導を進めていくことができた。
  - 複式指導の間接指導時の様子をみとめるためには、どのような交流をしたかを把握するための発問を工夫する必要がある。
  - 単位時間内で、課題解決の方法に焦点化し、学び方・考え方の過程等に注目させた振り返りを行わせ、評価規準との整合性を図ること。
- イ 記録を残す評価を行うことで、児童生徒と教師双方が達成状況を把握し、評価の一体化を図る。
- 本時の中での自力解決や学び合いの場面や、適用問題を解いている場面等で見取ることで、授業に生かしたり評価したりして児童の理解の様子を把握した。
  - 座席表やロイロノートによるチェックをするなど、状況に合わせた媒体で記録を残していくことにより、児童の達成状況を把握することができ、記録に残る評価にもなる。
  - 記録を残す評価を単元のどの時間で行うのか、どの場面で何を見取るのかなど、綿密な評価計画

を立てていく必要がある。

- 児童の達成感と授業者の評価が一致とまではいなくてもズレが大きくなりすぎないこと。
- 複式指導で記録を残すことが難しい。ノートの記述や、板書などをもとに児童の思考を把握しようとしている。
- 双方向での達成状況の把握については、学校としての取組み内容が浅く、他校から学んでいきたい。

### ③ 「UAをゼロに！」について

ア 自ら学ぼうとする学級を目指すために、小中での生徒指導面の連携をさらに充実させる。

- 各学級で、学習に向かう雰囲気作りができるよう生徒指導に努めている。
- 小中での生徒指導面での学区内の小小や小中で生徒指導面の情報交換を工夫して推進していきたい。
- 十分な情報交換ができる機会が少ない。
- 小中連携には、生徒指導面を重点的に行うこともできるのではないか。例えば、時刻を守る、学習規律をそらせる等
- 中学校との連携を、5月の中学校での交流会の時に時間を割いて実施してほしかったが、実施できなかったのも、生徒指導面の連携を今年度どこかで取ってほしい。例えば、1月の発表会の後の中学校区分科会での話し合い時間などで。

イ 数学（算数）、英語（外国語活動）における小中の授業交流を行うことで、苦手意識を減らす。

- 校内研に位置づけて、外国語の授業を見ることができた。
- 中学校区の授業交流会を通して、小中・小小の交流を行うことができた。
- 現在時点では、授業交流を行うことはできていない。今後、検討が必要である。
- 3学期以降、中学校と連携しながら、英語の授業交流を行いたいと考えている。

### ④ 「学びの連続性」について

ア 授業内容と類型化（R4 綾織小提案）した適用問題を家庭学習として提示し、学びの連続性を意識させることで、自主的に学習に取り組む児童生徒を育てる。

- 本時に定着問題を位置付け、見取することで、児童の理解の様子を把握した。また、授業の内容を家庭学習につなげることで連動させ、学力向上を目指した。
- 本校では、家庭学習の学び方の指導を行い、ノートを掲示することで学び合う活動にとどまっている。
- 本時の学習内容を、授業の最後にドリルや宿題プリントで確認し、その日のうちに復習できるシステムにすることで、学んだことを身につけることができたり、次時での想起がしやすくなったりにしている。
- 授業で学んだことを家庭学習や宿題に連動させることを繰り返し職員間で確認し取り組んでいる。
- 取り組み方が担任任せになっているので学年、学級により家庭学習の取り組みに差が生じ、質の向上には至っていない。
- 類型化した適用問題を家庭学習として取り組ませることができていない。
- 全校による家庭学習への取り組みは、まだ定着していない。

イ ICT やアシストシートなどを活用して、一人一人に合った課題を提示し、個別に指導できるようにする。

- NRT分析後、アシストシートを活用して学力向上タイムに活用し、正答率の低い問題の解き方や復習を行っている。
- eライブラリの基礎基本問題を解き、個に応じた問題を解くことができるよう手立てを組んでいる。
- NRTやCRTの前にアシストシートで復習をさせたり、ラインズeライブラリDLに意欲的に取組ませたりしている。

- 夏期休業中に課題としてアシストシートを活用し、補充ができた。
- タブレットを利用したドリルソフトで前学年の復習や現学年の復習に自分のペースで取り組めるようにした。
- 家庭学習でのタブレットの効果的な活用方法について、今後も検討していく必要がある。昨年度同様、本校では、家庭でインターネットにつないでの使用は未実施である。

### (3) 実践を通して各校で育成された（育成が難しかった）資質・能力と手立てについて

今年度は各校が、それぞれ自校で育てたい資質・能力を定め、授業実践を通して各校として成果を上げていると思われる。

一方で、育てたい資質・能力が各校で異なっているため、組まれた手立てが妥当であったかなどを協議する際、共通した達成イメージがもてず、中学校区の単位で検証することが難しかった。

## 5 諸調査結果等の結果考察（児童生徒及び授業者の変容）

### (1) 児童生徒が主体となる授業改善に関する指標（岩手県学習定着度状況調査における肯定的回答）

#### 【考察】

前年度に比べ、中学校はすべての項目で割合が高まっている。授業改善を通し、生徒が見通しをもって学習活動に向かい、着実に学力をつけてきていると考えられる。

一方、小学校は、すべての項目で昨年度を下回っている。日常の授業場面では、学び方を含めて改めて指導を行ったり、学びの楽しさ・有用感を感じる授業改善を行ったりしていく必要があると考えられる。

自主学習についての割合は、小中ともに目標値に到達していない。今後、家庭でどのような取組をしているのか、各校が状況を詳しく把握し、自主学習の意義や方法について中学校区として考えていくことが大切である。

指 標		目標値	R 5	R 3	R 4	R 5
			本市	学区	学区	学区
① 意欲を持って自ら進んで学ぼうとする児童生徒の割合	小	84.9		90.5	81.6	77.3
	中	81.2		81.0	77.6	82.7
② 授業で、自分の考えを深めたり広げたりしている児童生徒の割合	小	84.7		85.7	83.7	77.3
	中	84.0		87.0	83.2	83.6
③ 学校の授業がよく分かる児童生徒の割合	小	94.0		89.5	82.7	81.8
	中	81.0		74.6	71.8	78.2
④ つまづきに対応した授業改善が行われていると感じている児童生徒の割合	小	89.0		98.2	89.8	79.1
	中	92.0		91.0	82.2	95.5
⑤ 学校の宿題だけでなく、家庭において自主学習に取り組んでいる児童生徒の割合	小	70.0		—	—	69.1
	中	65.0		—	—	58.2

※ この「学区」は、本中学校区の数値

### (2) 学校の組織的な取組に関する指標（岩手県学習定着度状況調査における「1番回答」の割合）

#### 【考察】

項目③⑥⑦については、目標値を下回っている。

どのように取り組むことが指導の充実及び徹底を図ったことになるのか、具体的なイメージを共有しながら「話すこと」「書くこと」を大切にしたい取組の改善を図っていきたい。

項目⑥⑦については、児童生徒の回答と同様に、特に小学校での取組が不十分であると考えられる。取組が担任任せになっている学校もあるため、学校全体で組織的に取り組んでいく必要があると考えられる。一方、日々の授業改善を進めながら、同時に授業時間外や家庭学習等で、アシストシートやICTを活用した補助指導を行った学校もある。そのような実践事例を学区内で共有し、学区としての取組も進めていきたい。

指 標		目標値	R 5 本市	R 3 学区	R 4 学区	R 5 学区
① 児童生徒の資質・能力の向上に向けて、「確かな学力育成プラン」に基づいて組織的に取り組んでいますか。	小 中	100		—	—	100
② 授業研究会では、児童生徒に身に付けさせたい資質・能力について協議を行っていますか。	小 中	100		—	—	100
③ 教育課程全体で「話すこと」、「書くこと」等の言語活動の指導の充実及び徹底を図っていますか。	小 中	100		—	—	60
⑥ 調査結果や日々の授業から明らかになった児童生徒のつまずきに着目した授業改善を行っていますか。	小 中	100		—	80	80
⑦ 学校の宿題などに加え、補充のための学習や発展的な問題に、生徒が自ら取り組める工夫をしていますか。	小 中	100		—	60	60

※ この「学区」は、本中学校区のみの数値

## 6 成果（○）と課題（●）

### 「課題意識の持続」

- 児童が、既習を生かした見通しをもつことにより、問題や課題を解決しようとする意識が持続した。
- 児童が「単元のゴール」をもつことにより、単元が終わるまで課題を意識して学ぶことができた。
- 年間計画を意識し、単元が進むごとに「身に付けさせたい資質・能力」をレベルアップしていくこと。
- 毎時の学習で身に付いた力を表現したり、単元のゴールにつなげたりすること。
- 家庭学習と授業の連動を組織的に図り、課題意識のより一層の持続につなげていくこと。

### 「達成状況の把握」

- 適用問題を作成することにより、本時のねらいや手立ての構想をより考えることができた。
- 指導過程内で、適用問題や練習問題を実施することにより、評価や授業改善へつなげることができた。
- 中学校区共通の振り返りの視点を活用し、内容を吟味しながら振り返りを行い、その後の指導を推進することができた。
- 学び方・考え方の過程等に着目した振り返りを行うことにより、評価規準との整合性をより一層図っていくこと。
- 記録を残す評価について、評価する時間や場面、何を見取るのか等、より適切な評価のあり方については今後も検討が必要である。

## 7 次年度学力向上取組の方向性

### (1) 育成を目指す資質・能力（学区で、あるいは各校で）

「思考力・判断力・表現力等」の表現力について、中学校区統一して育成を目指す。

#### 【遠野中学校区としての「表現力」のとらえ】

自ら考えたことを言語等によって表し、伝え、考えを深め合い、課題解決へつなげようとする力

### (2) 授業改善の2つの視点と目指す授業像について

※ 授業改善には、言語活動を取り入れる。

※ 言語活動の具体については、校種や学校の実態に応じ、教科・領域の特性を踏まえて、各校が創意工夫をしながら取り組む。

#### 視点1 「自分の考えを表す」

目指す授業像： 児童生徒が自ら考えをもち、話したり書いたり、動作したりする等の活動を通して、自分の考えを表すことができる授業

#### 視点2 「学び合いの工夫」

目指す授業像： 児童生徒が自分の考えや思いを伝え合う等の学び合い活動を通して、互いに考えを深めたり広げたりして課題解決へ向かうことができる授業

### (3) 次年度の重点取組

#### ① 視点1「自分の考えを表す」について（手立て）

- ア 児童生徒が、自ら考えや思いをもって表し、まとめることができるような言語活動を展開する。
- イ 児童生徒が、語彙や用語を活用し、表現できるように、指導の工夫を行う。

#### ② 視点2「学び合いの工夫」について（手立て）

- ア 児童生徒が、伝え合い、学び合うことができるような言語活動を展開する。
- イ 児童生徒が、学び合いの進め方や学習規律を理解し、学び合いの中から自分の考えを深めたり広げたりして課題解決へ向かうことができるよう、指導の工夫を行う。

#### ③ 「UAをゼロに！」について

- ア 児童生徒が、自ら学ぼうとする意欲の喚起を図り、個のつまずきに応じるための「教師の指導力」等を向上させる。
- イ 遠野中学校区内で、生徒指導面の「さらなる連携」を強め、家庭学習や生活習慣等の改善を図る。

#### ④ 「学びの連続性」について

##### ア「課題意識の持続」

- ・ これまでの成果を継続・発展させながら、年間指導計画を意識し、単元が進むごとに「育成を目指す資質・能力」を形成的にレベルアップさせていく。
- ・ 授業と家庭学習、家庭学習と授業を連動させ、単元を貫く課題意識の持続につなげていく。

##### イ「達成状況の把握」

- ・ 評価規準と、児童生徒の振り返りの内容との整合性をより一層図り、形成的評価を積み重ねる。
- ・ 記録を残す評価について、評価内容や評価方法等、より適切な評価のあり方について、今後も各校で継続して実践・改善していく。